

母との確執

兄、慶介^{けいすけ}の葬儀は滞りなく終わった。若干二十九歳でこの世を去った。

母の有里^{ゆり}は葬儀の間中ずっと泣き続け、目を真っ赤に腫らしていた。僕はそんな母を冷め冷めとした目で見ていた。

僕よりも四つ年上の兄だったが、大していい思い出はなく、それほど悲しくはなかった。確かに子供の頃はゲームをしたりして、よく遊んだことは覚えているが、年齢が進むにつれて、それもほとんどなくなり、お互い

に価値観が合わなくなり、それぞれの世界へと走っていった。

日常生活の中での会話はあったが、子供の頃のように二人して盛り上がるなど消え失せた。

兄の慶介が交通事故で亡くなったという知らせを受け、僕はとりあえず仕事を抜けさせてもらい、実家に飛んで帰ってきた。

母のダメージが大きく、とても葬儀の段取りなどできる状態ではなかった。僕が仕切り、その役目を担うことになったのだ。母も慶介も好きではなかったが、状況が状況だけに仕方がない。唯一、冷静さを保っている自分が引き受けるしかないのだ。

母を見ていたら、確かに痛々しく、ずっと泣き続けているので、親戚の人たちが心配して案じていた。

火葬場で兄の棺が炉の中に入れられ、扉が閉められたとき、母は兄の名

前を呼び続け、泣き崩れた。それを親戚の人たちに支えられながら待合室に向かったのだ。

母の有里は慶介のことを溺愛していた。僕よりも可愛がっていたのは間違いない。恐らく僕が死んだとしても、こんなに泣きはしないだろう。

母はとにかく兄のことが大好きで、いつも満面の笑みを浮かべながら、兄を見つめていたのだ。僕にそんな笑みを向けてくれたことは、中学生の時から、一度もないと言っただけだった。

葬儀が終わった後も、母はまだ泣いていて、今も座卓に伏して号泣が止まらなかった。

僕はなすすべもなく、そんな母をリビングのソファに座って見つめていた。泣きたいだけ泣けばいい。

葬儀が済んだら、自分はさっさとこの家を出て、自宅マンションに戻る

つもりだった。

はつきり言つてすごく迷惑な話だ。仕事で忙しく、プレゼンに使う資料づくりも大急ぎで取り掛からなければならぬ。今日からまた残業の連続だ。その資料づくりは自分にしかできない仕事だった。

そんな忙しい最中、母は泣きながら「けいちゃんが死んじゃったの」と言つてきた。取り急ぎ、上司に事情を説明して、仕事を抜けさせてもらった。

実家に帰ったら母が泣き崩れていて混乱しており、要領を得ない説明だった。が、僕はなんとか交通事故で死んだことを知ることができた。

そのこと自体は確かに驚いた。あの慶介が突然の交通事故でこの世を去るなんて。二人兄弟のうちの一人が亡くなったのだ。

親なら悲しくないはずはない。母が泣いて当然なのだが、僕はそんな母

を見ていて興奮めしていた。